

生物多様性とインタープリテーション

古瀬浩史

(日本インタープリテーション協会／自然教育研究センター)

※環境教育学会ニュースレター第85号(2009年3月25日)に、「論壇 生物多様性と環境教育」として掲載されたものに一部加筆し、タイトルを変更。

「地球のいのち、つないでいこう」

これは、環境省が生物多様性に関する国民の理解や行動への参画を推進するために作成したコミュニケーションワードです。1992年の国連環境会議(地球サミット)において「生物多様性条約」が採択されて以降、生物多様性は、環境教育でも重要な課題の一つと考えられるようになりました。日本では2010年に生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が愛知県で予定され、また2010年が国際生物多様性年でもあることから、関心が急速に高まりつつあります。私は主として自然公園や自然再生地域等における普及啓発(インタープリテーション)を中心に環境教育に取り組んでいますが、私の分野でも生物多様性はホットな話題の一つです。この傾向はこれからも続きそうです。しかし、生物多様性に関する教育はとらえどころがない面があるのも事実ではないでしょうか。

2007年に政府が策定した「第三次生物多様性国家戦略」では、教育や学習は基本戦略の一つに位置づけられ、分野横断的で幅広い取り組みが求められています。私のように現場で環境教育の計画や実施に係わるものが生物多様性にアプローチするときに、まず指針とするべきものはこの国家戦略だと思われます。

一方、国家戦略の中では、教育普及が重要であることや機会拡充策については多くの記述があるものの、具体的な内容や方法についてはほとんど書かれていません。自然公園を例にするなら、これまで取り組まれてきた「自然とのふれあい」の機会を増やすことは重要ですけれども、もう少し具体的にテーマや方法の検討をしなければ、現場の担当者が生物多様性保全に向けた教育活動に取り組むことは難しいように感じます。

インタープリテーションの分野では、プログラムを計画する際、「なぜ(目的)」、「何を(テーマ)」、「誰に(対象者)」、「どうやって(方法)」伝えるかを検討します。国家戦略などの資料では「なぜ」は、整理されていますので、それ以外の要素がこれからの課題だと思われます。

昨年末、私は自分の関心から、知人を中心に10人程の生物系研究者に、「生物多様性に関する教育普及において『何を』もっとも伝えたいと考えるか・・・」というインタビューを行いました。その返答は見事にバラバラでした。ある人は種の多様性に重点を置いているし、ある人は遺伝子の多様性、また別の人は機能としての多様性を重視しています(非常に「多様」です・・・)。もちろん、それらはすべて関連しているのですけれども。

冒頭の「地球のいのち、つないでいこう」というコミュニケーションワードは、インタープリテーションで言うところの、テーマ(Theme)にあたります。テーマは、プログラムを通して伝えるメッセージを簡潔に示した文章です。テーマを共感と共に受け取ってもらうためには、それ

を理解するベースとなる知識や体験が必要です。例えば、「生物多様性が重要な理由」であったり、「自然の多様さを実感する直接体験」だったりするでしょう。さらには、「生物間相互作用」や「進化」といった科学的な概念の理解が必要かもしれません。そして、それらの内容は対象者層（年齢など）によっても異なるはずですが、このような「何を」「誰に」伝えるのが整理されれば、現場のインタープリテーション担当者は、「どうやって（方法）」をもっと具体的に考えることができます。自然公園以外の環境教育の現場にも同じような状況があるのではないのでしょうか。

環境教育やESDという幅広い領域の中に「生物多様性」という一本の軸線を引いて議論することは、そもそも、環境教育やESDで何をめざすのか、ということを見つめ直せるよい機会になるでしょう。皆さんとの意見交換を期待します。